

第5回基礎情報学研究会実施報告

2013年12月22日
基礎情報学研究会 高田信夫

- 1 日時：2013年11月17日（日）14：00～17：00
- 2 場所：コンピュータソフトウェア著作権協会会議室
- 3 参加者：19名
- 4 テーマ「情報システム学の新たな展望-基礎情報学との対話を通じて」
- 5 講師：中嶋聞多（法政大学教授）
- 6 講演および討論の内容

講師の中嶋先生から、今までの情報システム学研究の歩みを振り返りながら、慶應大学での浦昭二先生との出会い、基礎情報学との出会いが語られた。そして、今後の情報システム学の新たな展望に向けて、基礎情報学に対して次のような問題提起がなされた。

- ①実践性の追求：応用情報学ないし実践情報学の構築
- ②ルーマン社会学の視座の是非→社会学を超えて
- ③中範囲理論（組織やコミュニティを対象）の構築

その中範囲理論の具体的な例として、中嶋先生が現在取り組んでいる地域活性化が取り上げられ、マーケティング、イノベーション、ブランディングについての話があった。

さらに、今後の基礎情報学を考えるにあたっては、大東文化大学の内山研一先生のアクションリサーチ的な考え方や野中郁次郎先生のSECIモデル（暗黙知と形式知の交換と知識移転プロセスを表すモデル）などが参考になるだろうということだった。

それに対して、西垣先生から次のようなコメントがあった。

- ①基礎情報学に対して実践性を取り入れるというのは賛成である。
- ②中範囲理論ということで、地域活性化という問題には、集合知が関係してくる。集合知はスーパーの仕入れの数のように答えがあるものに対しては有効であるが、ダムを作るべきかというような答えがないものに対しては有効であるとはいえない。今後、答えがないような問題である公共哲学と基礎情報学の関係を考えていきたい。
- ③近代は合理主義から発しているがそれではだめであり、身体知や暗黙知から出発しないとだめである。
- ④ブランディングについて言えば、ブランドは社会から見たときにどのように見えているかを考えるべきである。

その後の討論の中では、地域活性化に向けて地域の住民に地元愛をもたせ、いかに若者を参加させていくか、そしてその集合知をどう活用していくかという問題についての意見が出された。

それに対して、若者を地域活性化に参加させ集合知を活用していくためには、いまの高校生のコミュニケーションの形を変えないといけない。いまの高校生はスマホだけの世界にひたっていて、集合知がまちがって動いてしまっている。それでは地域活性化に貢献しないだろうという発言があり、それに関連して教育の問題にまで議論が広がっていった。

7 今後の課題

中嶋先生から問題提起があった、組織やコミュニティなどの実際の社会の問題解決への基礎情報学の応用についても検討していく必要があると思われる。